

れきみん

# 資料館だより

No. III-9

相生市立歴史民俗資料館

## 〈神社を訪ねて—石造品の石工—〉

相生市内には数多くの神社があり(『相生市史』第4巻には『兵庫県宗教法人名簿』[1985年度]に記されている48社を表示)、いくつかは当館の事業「史跡めぐり」でも訪ねました。

神社の境内や参道には、鳥居や灯籠、狛犬、水盤等の石造品があり、寄進された年号や献主・願主・世話人などの銘が刻まれているものも少なくありません。それを見ると、その時代に生きた人々の願いや経済力、関係性や時代背景をうかがい知ることができます。

「市史」では、7社(相生・天満神社、那波・八幡神社、佐方・八幡神社、野瀬・賀茂神社、野々・天満神社、下土井・大避神社、森・磐座神社)の石造品について紹介し、江戸時代の年号をもつ28例を示しています。他の神社も含めて悉皆調査をすれば、その数はさらに増えるものと思われます。

中には、以下のように製作した石工名を刻んだ資料もあります(神社に所在する江戸時代の資料に限る\*)。

◇ 相生・天満神社

- ① 灯籠 文化6年(1809)  
「石工ハシサキ和泉屋伊左エ門」
- ② 狛犬 文政2年(1819)  
「石工鯨崎和泉屋伊左エ門」
- ③ 灯籠 嘉永6年(1853)  
「石工植田良平」



資料①

◇ 那波・八幡神社

- ④ 鳥居 元文5年(1740)  
「嶋村住人西村利平作」
- ⑤ 燈籠 寛政11年(1799)「寫村石工西邑九良大夫」  
「石工同人」
- ⑥ 灯籠 享和2年(1802)「石工和泉屋伊佐衛門」



資料⑨

◇ 陸・天満神社

- ⑦ 狛犬 安政4年(1857)「ナダ石工吉五良」
- ⑧ 鳥居 文久2年(1862)「小豆島大部村石工亀三郎」

◇ 若狭野町野々・天満神社

- ⑨ 鳥居 享保17年(1732)「播州嶋村石工西村氏利平」

◇ 矢野町二木・八幡神社

- ⑩ 鳥居 元治2年(1865)「石工塩市弥三郎」

◇ 矢野町上・天満神社

- ⑪ 鳥居 年代不詳「生石村石工惣右エ門」

◇ 矢野町釜出・八柱神社

- ⑫ 鳥居 万延元年(1860)「石工塩市村万助」

播磨には、竜山（現高砂市）をはじめとする良質の流紋岩質凝灰岩の産地があり、すでに古墳時代から石工集団が活躍していました。江戸時代においても優品を数多く製作し、稀に石工名を刻みました。

資料①②⑥には、鯨崎の和泉屋伊佐衛門（伊左エ門）という同じ石工名が見えます。資料④と資料⑨は嶋村の西村利平という同じ石工名で、資料⑤も④⑨と同村（同じ居住地）・同姓の西邑九良太夫です。また、資料の⑩と⑫も同村です。

鯨崎（ハシサキ）とは、現在のたつの市新宮町鯨崎ことであり、揖保川東岸の鶴嘴山は流紋岩質凝灰岩の岩山になっています。JR姫新線のトンネル北側の岸壁が石切り場跡とされています。

鯨崎石工の初出史料は『三木家文書』とされ、享保3年（1718）の記事に「石屋伊佐衛門」の名が見られます。また、「和泉屋伊佐衛門」の名が刻まれている石造品の最古の例は、揖保郡太子町 鵜 所在の天明4年（1784）の石仏とされています。

「和泉屋」を名のっているのは、鯨崎石工集団（望月・森・横山・渡辺・溝井家が江戸時代に活躍）の先祖の生国が和泉（大阪府南部）で、和泉石工集団の流れをくんでいることを示しています（現在の泉南は緑灰色硬質砂岩=和泉砂岩の産地で、中世から近世にかけて和泉石工集団が活躍した）。

年代の近い①②⑥は、ともに森伊佐衛門光永（和泉屋伊佐衛門名を世襲）の作とされているもので、淡い黄褐色を帯びた白色を呈しています。伊佐衛門光永は18世紀末～19世紀前半に活躍し、たつの市域とその周辺に26作品を残しています。

一方、資料④⑤⑨⑩⑪⑫の嶋村（嶋村）・塩市村は現在の高砂市米田町島・塩市、生石村は阿弥陀町生石で、竜山丘陵の東部～北東部に位置しています。近世になると竜山石の採石は再び盛んになり、姫路藩の庇護のもとで採石・加工・運送が活発に行われました。

竜山石工集団の最大手は嶋村で、石工名28、作品59が検出されています。嶋村石工の最古の銘をもつ作品が⑨で、極めて貴重な資料といえます。西村利平は22年間で3基の鳥居を残しています。また、資料⑤の西邑九良太夫（西村九郎太夫）は70年間に10基の作品（うち7基は撥竿形灯籠）を残しており、世襲2代以上の可能性があります。

塩市村は石工名18、作品23が検出され、⑩の弥三郎は2作品、⑫の万作は当資料のみが知られています。また、生石村は石工名19、作品39が検出され、⑪の惣右エ門は2作品が知られています。⑪の年代は不詳ですが、もう一つの作品（高砂市・生石神社の灯籠）に天保15年（1844）の銘があることから、19世紀中葉ごろの作と考えられます。

竜山石工集団は鯨崎石工集団に比べて村数・石工数とも多く、その作品は播磨南部一円に広く分布しています。また、石材は淡い青灰色をしているのが一般的です。

資料⑦⑧は花崗岩製で、花崗岩を産出する現在の神戸市東灘区や香川県小豆郡土庄町大部に居住する石工名が刻まれています。他の作品は知られていません。なお、資料③の植田良平については他に例がなく、居住地は明らかにされていません。

神社を訪れた機会に、石造品の意匠や銘文を観察してみたいでしょうか。

\* 他に寺院や路傍等に所在する例「魚峯久右エ門」「龍野新町和泉屋七右エ門」「タツノ日山小嶋徳兵衛」「坂上定次」「かりや石平」「加里屋新町大工弥兵衛」が知られています。

〈参考文献〉

地主 喬 1987「相生市内の社寺」『相生市史』第4巻（相生市・相生市教育委員会）

藤原良夫 2005「石造遺品」『播磨 新宮町史』文化財編（たつの市）

藤原良夫 2016「石造遺物」「参考資料1・2」「付図2～4」『高砂市史』第7巻 別編（高砂市）

義則敏彦 2004「灯籠」『揖保川町史』第2巻 本文編Ⅱ（揖保川町）

義則敏彦氏より有益なご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

（中濱久喜）

